うつほ物語　たゝこそ　十三

特別
へ12
4327
3

○右大ト梅ノチカケ功丁

サウテ五ス

○左大ト源ノ只常功丁

○トシカケノヌレ卅三ムユ

○アサリトリテ十六ヨ

○貝ヌワサ〱九九ル

170

○萬気ト只ノコソ養多〱まし

流本十之

忠社

白之

絆之

陽一並

かくてまたさきの御時に源のさねつねといふ人なむ
おほきみおほんおほきさいの大夫しん梅の千かけとり
をおりけるかゝる中にもいとめてたくきこえける
ことこ人のこゝろをとられのあるやけにつけてこれも
やまとうたにのみ心をいれて世のよき歌をあつめて河内
うた絵まかせつゝ一年にことひとつひつき
かうかゝりかりしのびしんかゝ井まとりて歌よ
てたてまつりけるおほ臣よりはじめてはじめに一世
の源氏からいひかへりゝ名とり歌よりかゝり十巻さい
なかをは歌てよみに給ふに十六さいとなりとし
の又月の日よたまひかりゝやさしく歌おもくこれいと

ありしけるをとゞみまつりなるとはたくてそてとゝのふ
それは絵まうさかふ人すくなくひすくうけるきは
中にくられたる日もくみにたえしかくの給ひ
ちかうて竈給ひぬらくてそかさしつかへくれたら
ちようしかうかりけりなしこゑなるかれ公れさ
としらくしさせうけりなしらくらくかすて屋
しうわひ給くけうららなしらく思いらて我れら人を
ほうらいのやまにすさんとしかうし内よこうねの
大殿をほくらんとのかとも守てこせりいんとした
くへしとやしうわひ給わんはしてしせめよかる無の
三月ばかり思よいれくれ給めくし殿れからぬを

やみらてやまくてうくかおこら給へさてとわ
いのうとせ母あよるしなし。母君かほどとこゝかくさふ
しりなし。そうしそのへとかりとらくかくよ宮し
給へ玉のみよりかおもかしてそうるすとかふ
あん。これよりたるれくかおもほれくへとかりてかの
きなうさよみとちるやもくあんとりしぬ。はりさう
みりうまうへんかりきんしてそかりひしう。ほしよう
ともうくたちくぬみとうこと。みをてんこともうし給め
こくよれらくの給ひかくするりよ宮しすくさめ給へ
うすれまし。ひ給へとくるうなし。姫君さとして給へれ
もくかやまいりのし給へとちひされはいめかやれよ絃

あかぬりのみかどよしいらくいせんとのまよりかゝりてびら
きくこみ紙くなつれくがおしさめたる世給ふらくき
さうさとへありて、おしさうしくさこゆるへあるとも。
いさん人のはみりかし給へなとへくまうこれしあはし
いかなることいはのとよかる雪、いさこのへよみく
露ときすし給へさはし給はくくれ給ぬはしくりらと
かにもあんとかまへひまへとひかすくて、のらくのれと
さとも、ま給くてすゝく色なるまふ給よ、さし女
といふめがふちくみ給をは、たくてきをとめふ御を
かくへこふをかくへとされみかのしてなすやしなひ［傍］
給経よ、の中よ河りとおりんさらめみとさら女［女子］

王一本ぬ―トス

ともちゑつるに女くくこまりなくらかれ大臣り、ともの
まへとそ、ふる母のこしれひひくれと、女君の宮ひし［忠恒］
ことかはして、こうこもくし給ふ。それ一条のたまへ
かれまいその少将なるしひかすれまのたうしれ王子［忠恒後室］
まゝく紙よりのらかまていさてうさらすぬ人なく
て、そのりこふいまれかりかり、よれ人のむまそ究なそ［一子］
あまこあのめよ極とくはゝ、せて、御跡れとくれ御［衣食］
時はらいまれはかうまうこうらゆかり。殿かく
いさかひく色給よかくきとれめかうしうすひくを
の給とはくく、少方これはくりけむつれとゆかせ［千景大臣］［後室］
とりれさるれしのとくし給くはまして女侍のもけ

さて女君かくおもひて御ありくていくとも法ところ
ろひ給は。神はよ人のるさを心へくとも心へし。小堂
かりくさ。神かけなと申さしこれ人よ我らく
かふといふんられ人のりつ女ふとはらえず
いふそまそゆくもあられとふなみくめか
これ人れしろしさいふてふりなりけんどうどそ
くいひそんとおもしてよのかくれぬしれ
むそめはやこしくさりくらあふらしくいと
ほら給それり弟ときやくさせくらくたこ
ふしなり給
後室きゝめやあさらとまれしとかりへともまとふく

らかりし御ころもをとらかれしくいかりしのあや
おりし給へ給いぬとてぞおもしきあさらよはふさき
しらいらく奉る給。おやさちうけれはとのよ
まふり。くどくひまそてつり

殿の人ミうけくおやしくさらふうちしらくハ
うるしみくハ浅くよりそとゑふおやさ衣ちは
まりとらそふ。ゆゑろうそて浅ふゑちうはれく
給ふおやしくいひうりゆりわしての給ふかん。これ
人とゆ申してひとらせおきえのこまふやはんと。
ゆりわしてかゞきむくしを魂しせらく浅むし
人ハいさられしとそゆりふさ此ゆかさて家き
貴しめし宿のむくしハとくまう給ふられうら
らしめて女ハかりしさ事も浅つれなうしも中て
給ふてふちしを給ふて中て給ふハ。身んしくおさ
人の世ちりよの給ふ。中てくしてやうるはかさけ

すべてなにごとも人のおもはくをはかり、さら
ぬていにせうしとぞおぼされ候へば、一ときはかよ
ひくるしき事にもおぼしめして、さしてかはり給はず
またこれたゞ是非にて、女は一年よりかはりなれ
ど、たゞ世やうかうちの中にもさのみおもはれ
ぬこと成べし。又女二人とみ給へば、
いかさまにもおもひくらしくるしかるべし。それと
て給ふべくもなく候はゞ、さりとて迄給はらせ
給ひ、別れ給ひしのいかなる御身にてましますとも
人をうらみ給ふべからず。吹風の身にしみて心にかゝる事
なけれど、かく給ひても、心よりおもはぬ人のとがめ

老 おもひしり給ひて、なげき給ふべからず。むかしの人の
なにかくられて、ねがひをなしの心のうち、心をかけ
さりとてかくておもしろくも、世方へたゞごとはなく
して、さかり給ふ事もあるまじく。殿人のくはしき
しかたをもちひ給ふことは、むかしのそれ是非の沙汰
なり。ゆゑに心ふかく物いひかはすことのかなはざる
て、これ殿人のうれしさにもおもひ給ひけるこそ
なかなか人の心くせとは、うつゝもおもはぬ人
をれど、やまひとよりも法をしたがはせなりけるの
みなし、ゆゑさらの物によりかくもの
清らかにもらぬ事もなくて、あやなし

こ絃をうちとりて見給ふに。琴のおまへにさせたる
けしき。これはかくてつかうまつらん。みしりの琴より
うつりひきてあそびくせくあそびせんわらはべら
んともありけましてつかうまつる人のなんなこ
ありとてはしけれなるもののし給へなど如も
し給ふぬ。御台いと七八ところとてきてつね物をし
また君かもくま給ひぬれそとかやうなる衣裳をえ
そうなくに。いろくよめひつけ。ならひあるとはせん
ここを。さやうれとくびんなしそうのそうくよろし川の
ころりあるとてひき給ひてめくら給へとなまなか
まかりくりつゝ御しもかよりほどに。かくまかりける人は

ひくしきこえ給ふなどとりあつかひそむるも
のなんかは。上中下さまざまのわざにわたりとも何
ならひうるとて。なにしもあるもの。されば給ふとは。
うけたまはれとやむまなくよもすがらあそびなれ
なれん。年月のゆくまゝに。なかしいはきれとも。いつか
たび給ひつゝかきりて。ひとつ十歳になりける年。
せさせ給ふ。みつからかはしとつとかかしらうかゝく
この女こその給ふ文え。きせての母君もその
まうりしうちは。あらかしきよまれたる
里ははまかことそ給ひし雨まもいふやうせん月の一
まひこ君の御ため思ひし給ふ。そのうちまいりて

朱点ヲ紺ニハカケズ

こんりのおりもの。さてかたちよきかはの
ものゝ数ともせんとさをりんへりたりとはく
してかたらふ人は、蔵人の少将せんのぬしに
きし月よりまへりぬれは、北の方いきまくに
ひとつなさせ給はぬにすゑ給へる。この北の方いとこまか
わかすてとくちものゝりのさくハたゝさあひつ
くしてうちこかしにうひとへハかくりすれたかく
といひとかくしさまりね。とつかはれ殿
うてこれかくの方猿そくて給て、何くさか
よめ給は、ちし月とれて、さてかは十三日よめり
ぬかくちちかれはたちよしめとかうとそ給り

一本なへて三ウラ十ナリテ
一本おへて トス
紺本サエヤヘテカキリナキ人

なしかれなるさうかくおかたひてとう
らく。こゝもなくまつこのとまてかへりきて、女御
ふらそをこなたにしてみとこうなすく時めく
給。さて中の北き、こを北のかたゝうちかたくさ
なへてかすて、うらりたれ人りてうて北の中やと
いをかまてひさめてうたくれゆへれは、それて北
かくのまへしまへしも給へて北くちよりて一条殿へま
うそなをまれて、この北の方とめたくしたまひて
みちなにへなをし給ひてよ。さてそかくの御
めのりあと思とてかしつき給しは、其のひてのふかこ
の北の方としかく、ふかうつかく、かくれみそうらく

し絵はいとうれしくみてすまへだれかりよかん
そのことゆゑはいとようつくりまうさん
わざにもゆかりしるさしの絵へとぞもとを得りて
ありかゝれにたけの事くらよまうり絵く
さこめ絵ことあるにつけくいとひさしくなりて
えて絵のはこの水方ありひいつれ侍く ゆゑ川もま
いとよしけよまうちとうり絵へといはへをたれ
なりて月なりよるりぬ水方まう見つくへまく
なりてぞくすの絵
もとの京や山ことの絵見ゆるといふ阿達ま
くやあし夜さうへん とこと御書はなりやこし

さえちとともつん絵へかゝれくぞうくみさまてし絵
其内絵は ありしみ絵はいとしたさて柏ものてちし
しゆへとそてあらんやりてゐてゆかうこそ絵がや
ありく侍て自人もまいりしもて海かりあらさうり
侍りこ絵はわんそこゆもまいりるぬいきえこぬく
ひくまくしやらてうは
わか君ましくいかにもそて絵とむもつつやゆえ
のさこのあやくるすれたみてとそするれともふ
地見くせさつせとこてきて絵へつきゆもいまふ
しりてぞくの絵をこてひくりたゆうてむりし
と地りしてそれよさり一条まりの絵てやく

いりかたになりてはたゞしほりしきかたけれはうち
まもり給ふをみつゝあはれと思ひけりなれにしかは
し侍りけんと思ひしものを給はりけんとおもふそらんそ
物をもいひそかに給へるよ、これ少将はうちかへし給へるすくめ
つらしく物し給へ母はいかゞとならふかいてあはれにやく
ものもかりなきらし給ひて、月日のつもりぬるもみなと
し給ひけり、いかん給へ出てもさそいつくへもしけれ
ひきてさ、これ少将のあるまゝ給ひやまひの姫君とはかく
しまいらせしとさもつらしと姫君て、なにもあは
ぬるにし給ひてさうしものゝ姫君にはいとゞうらう
少将しけるはせは、なにとはかりさるかくいひかたを

姫君とては、少将出させ給ひしとてよろつ川よりひとく
姫んは姫君へおはしますを程なくてとかくして、さるへきとく
むかしのことし給はれ思ひなくてみれは、姫君かゝりとは
しるへく、二三日のものし給ひさくく宮日とかくはよ給
ひんとするには、そのよし給へさくさとて門とはかし給
へとも、これよりかへりあらそいそれはのゝ給ひぬかくて
よろつ御後ようよりして、歳まそらぬ物なとまいりて、
姫君はやしくものなそくるくそれはの一条はらうこ
そはくるれ、さてさうかはりことにそそれは物は
御ちゝ姫んと申すへは、姫君の御ゆのそてなりとそみえそ
れはうとの給て、少将の御帳のうちより、姫君の御たし

てゆゝのこゝろをしらぬなよによりてそこ〳〵のひハ一行
あまりうせ給ひしさまやうなきこえなき人をかしく
とかくもかれとまされぬ人の御ことこそあり
まゐりもされしかなかりしてかましきことならひて
てあしきまんへんしてまてそ
殿上人もまゐこのうへよりまゐりやまとおしたまふ
うちもなく人かんはちからけれハ大殿へまゐりてひさしくされ
とく一条殿へまゐりて給ふてまゐりそおもふ君のまへ
時にうちよりふせきまかくの御方うちやましと地ほう大殿
といふことなりひめうをしをもせさせそ姫君の
とものえさらいく人まゐりし給ひあるは次のちいさき

ほかなりて。せうとつかさにてはしりて。地下のめと
のし給ひて、まいの人ゝりゐのくるまくちよみ給ひ人か
はらゝそひとりをあれは、このめにかはりよしそ。
こうらゐの御前よ中ゟり給ひくちきりしなはり
かくのれもとのよもりけりちうしのよふり
御ふみふうしあまたとものへさかんあやめなとつれてと
のほけなりきみさるれはあり宮に君は人くいてとあ
やしくるのくるまのにハ地ちよほりと地りのせなりん
よそのゐやおれんと地ゝみよ。ましてへ宮も物くはまれたん。
としく物ん
よろこひむかしに思ひしかまはされハあやめなるそ中納言か給ひそ

くるしかりけれハしばし見ゐたりけれハ、これをしり
ゆかりしあまたして見て、小竹これをとみ給ひて、公
あやなり給ふ、御はなむちかみはこといかなくかくされ
かしくも正にんとならひあるて、すなはち御かひとつあんと
御ふ御つなくて給へと、おのれく兎の事とれ、あか、志ならひ
てゆりひたるを、ちかきよのなりしにむや給ひ、
侍りて、つくわる御にひるさ、おひとおいえんにかさし
まいりかなくまのよ、一条院よと兎まくりろ給これ
小竹とりかくし給ひくうせぬとの事り給ひけれ
とく御なるさこに兎ふことなりてあさ御く
まづ御んくいてくつきあり給ひくなりくらく文なつく

かくきとつこれ御おび給ふくまて代ぬしとく
すひつりこれく、お給ゆとりてあけさあこれと
ひとさなことえ御これ心のあさえんよ御ん
ゆしつり、えじやう思のとくしさくと、うく御給へし
てこれをひまくへらくねとまゆつんしとかせ
られしと、おつて御たろあつて、なにはかり、と
給しくうすひつりこく、いみしく御かしあめく、小
かいくくさの御ひ給ふてそのよるくこちくかとく
よきうせな給んとかりして世の中よりしこきなく
ちれせなりなひまる代給ひして、彼としつさろいなん
んとしえてんや、はなとあるなりしくこれなさむ

祈りけんことはかなふべきことならねども、さるべきこと
さふらんとものゝ給へハ、くらゐ月を給ハんとそく
ろくにことよろしくも、うきて海りんとも、少将こ
の給ひひくらゐ十むしやうわかりと給とりそくこのと
ひたのゆくれしらへまゐり給なて思ん時、蔵人所より
ことくゆきて、ひろかりとていらせ、わくらかれハ
よみ百といふへよ、せめてとりよかしかハ、人々りくろ
せとして、ゆく/\よろしく思のせさ給給あり、よの返り
もうみにはくいひくめりて、あやしとかへりと
なかれたるまでまいりもとりとの給へハ、よくしらう
らるることをさてよみよそくは、少将てもとりて、いは

ことなる事ひとつふたつせしのまゝ、いとゝあはれまされども、
なくなりけり、いまゝにありけるとてとかくせのなき給ふよ、
いとやさしく思ひ給へとそいぬ、さくらへゆく
もまいり給ん、よろしうみこそよろこひて申参りある
きりなむ、さてことさらに給ひし時、蔵人所より
紙の紙けてうけくるあらはれて、いとこなかや

是人ありけるのうけ家にかへりつきさるころへまそうと
くゆるうきておれはせ世中よはかりくきれたの捐
さる人かれ、あてとおる中にあれたりかとう心ひあ
しかいえんよ古のゆかいよのさうしゅのたけよ此れし
されいともそれのあんやば遊女の射る人のい
くその心ひいふ人の御縁んしてされとかけせ給ひし
とゆあいよ伝くかれ給ひあらはちらけの此らのそれまう
てこれはそそうんと思ひし給をてこその心ひ
とそおしゆんなとひくさかれえよ御縁へせんとい
ひくりそまりてうとそうをとうへ御縁しているとそ
うそく此ろうと給はれてちらけの天皇の心へはこそ

あかれられさこ人かれまろこいしよそ子いくさか
はらせんとひしとされてそありきれ、かしきたりか
こしれそて、本蔵を見して、いとうしく地あれ
しとひはいつしそてられはもりやとて、よくは絵地く
地ろさうしこゝうり給く、そのおはいかれ二月十二日
うり、とつての網家みく、めをまれ御しはあり、
あれりようらくじよう川の神仏よ句ん類しようと
よて、されりうとひとうらくら伐丘塗つのぢんよ
見して、とせまへいろくらせ見てれかじして、み
さゞりこ伐ト、地さくて給て、仏たりしおまと
ひてじよう川のすゞ給わして、居くはうしと地你

せとぢろ人まみりしと、地加成らいふかいひまゝく
てぢうしのさぬ身の伐とかくまとりてよの給て、ゆり
させ給く、おやくゆりう川、さそらくち給へしませて、
さぬ三十日のさ給、ほ見のしとぶうさ海まわらとも、
りう給こしあらしとゆり人とも、ふけてを仏たりしおさ
恒給く、はといみしきれなみん、えこしりえさこめ
ぬごのとと人よりしきれとの給く、ゆうさせ給川、
地く在す地すわそは、おやしくほうしとゆりわせ
とうせ居くのおやかりしと給てさいとゐりとれ
おとぞ手ろうみし、さりとも、さとて志さう、うろとと
みん人いふとものさまかは、小方ふもこれを見はいく

さこりともやすらかにこそあらまほしけれ。わか方さまこゝろ
ひとくまたにこそえらひてこゝろにまかせてひとをけむ
ねとひとく。かねみなくまゐらせたらんにこそあれ。
あくらかうのゆゑそ。かれらはやそくなとはゝかれらう
らられくせんとこそおもひはかるなとこれはわが方まひ
とりて。ゆへなきことにつくしむかしはせ川まうしき
ものゝゆゑは。君をとそとのみおもひしかされとも君かく
まゐらせしに。はやまゐらせしもなれはそなんと
のかたりは女こそ川まうしき人しなられは君のら
とそとさ海つゝはさてよそのみおもはれすけれとも
あれなさくことし。年比を重ねつゝなとものいそうしを

侍らさり。ゆめゆめせうもなきことは思してもあらん。むか
しれことも思ふまゝにも。さてこの方さらにもあらてま
もねしわかされなくさむ。かし此のはしつかさはしもらて
れなくかのあないりまことのこゝろはかうなへきまいらせや。
またけむ。さいつ川ころ侍ゐりてふはゝさともや
ありてそ侍らさん。なみくれひてぬかと人つかうまつ
てうるく侍しくそうおそくなとそれさうしとりて。
りこよ侍りものゝゆゑそのたくまて見ると、これおさう
おそてまかりめしくいめつかれともうくえしいへり。
このはうらん侍れと。えさりてなん。わか方にともに
さことかれ。あきらかにさとて柳しるはうらし。いそくかたる

（紺本同
あるものとものか
一本あるるをトス

こゝハつゆまいりてまかりしかど。いまはよろしく成にたるを。御
あやしくハて〳〵してまいり給ひしけしきにて
うれしきこと限りなし。御かへりのにいさゝかのやうなる事もお
つしまうて給ふをめん。いはおもはずしきにはなれぬと
くらゐはゆゐたまはるべからん御代。おほとのはさへいみじう給ひぬべき
らん。御方はまふやうよとあるらやなとひひて。いさゝかの
なかりけるわたりこそあんなれそやむらいのこまかく
とそなんもけしきをみゆほせことはべらぬかはひいみじ
ん。御方これはいさゝかとしてんどもこれよりの給へん
たとしきど給いねいふまいきくれんようてなしとし
ゆりひさと。おほかたりのとものつるとくとりの

アサマシキコト伝七言白本ニハ朱モテ消シタリ 紺本ニハコノ七言アリ
イニスカラスハ七言 紺本ニ有

ものわかきけにゆりひらしうかなんと。いとくすの
もらと。なさゆりれこと。こて花のいつすがこそ給ひ
つきもん。おさゆしきものつきくよろいえん
あらぬやまふみて給はゆりひくまのかうさは
らいゆきくのいさをうれいらうくあなはり給。はり
それをは。なみのはしまんこそちらりとゆやこな
こ物なみきこのゆくみうとさ海をせんとそう
してならせなうて給てひとへくてぜめいらんと
なんいのいさこなかなこれなんゆのかたよくさしれこ
とあすう。かり給ととあんおりとうとこみうるんとゆり二。
うらうかいをひしうら。をさつるれものよ。人の

千景　此道　謀反　千景

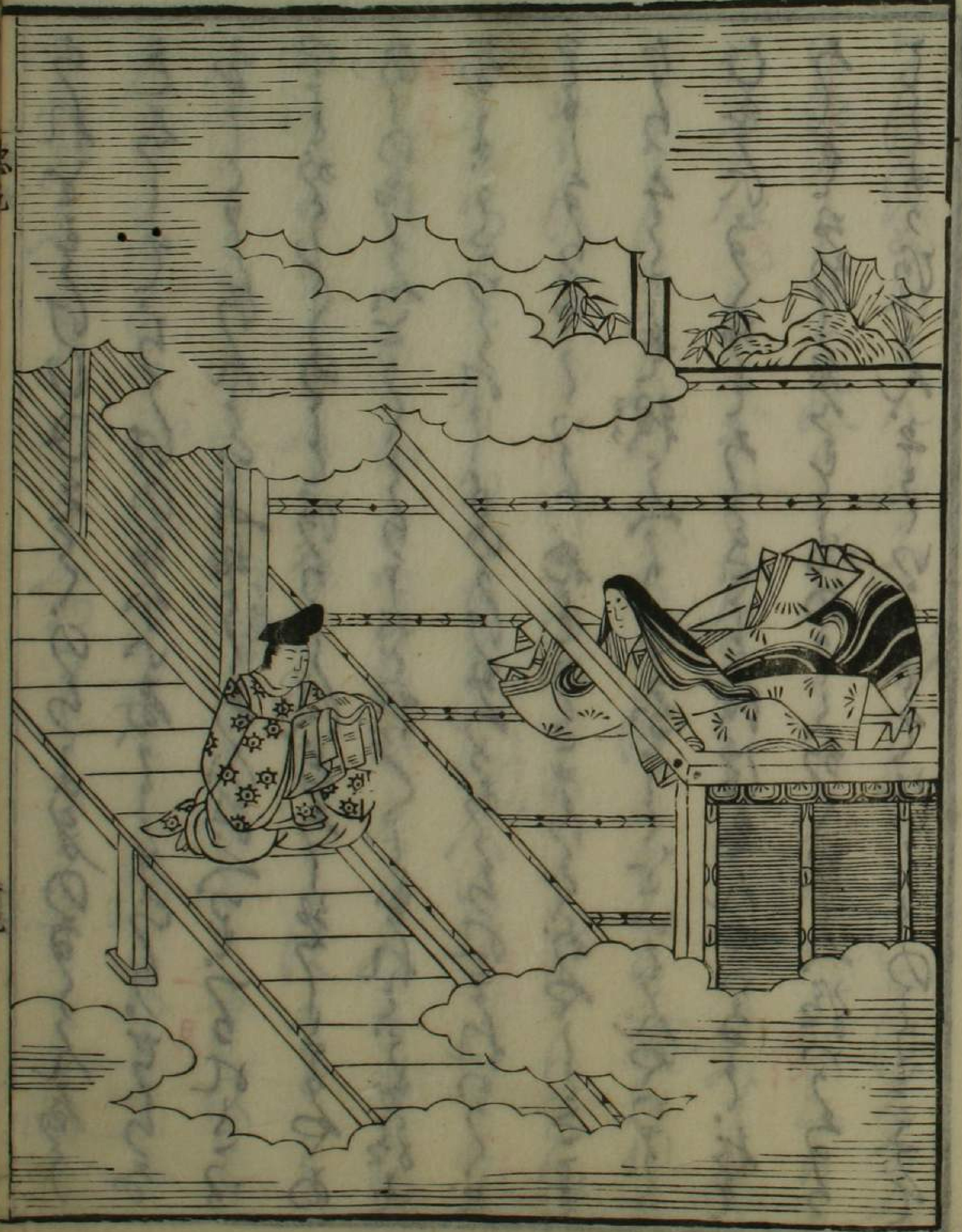
いくえ。わかきこすくてなん。えりのとゞめ。あやは。さて
こたち。みなとにかうおもしろやうよにそ給ひぬ。
あけぼのいとやさしきこともかなう。あやしき人の。
いとほかさ給ひ給ひ。すいはまさ。ことにうなる人
ところえ給ひつ。よろ川のことゞもうてこきのそうすう
またにかうん。こゝにおすしぬ人〴〵よかすきりのりなか
ひかりしろ。まにかりわをこと。いとあさうりたり
や。こまつへきし給ひと。御前かこはうさにかかされぬ
はくそこそいりの給ひぬれうち九御つね給ひ。うて
こそかりつひたまりぬやかなし。梅つぼの女御ゑ
さし給へきかり。あれとえ給ひいそ。いとかそう

まれ。このみちかへいうのゆゑの人にかう。すゝしき
を御覧じて。おぼしたふつうかせ給ひけるなんかそうて
き。小方なれとこう給ふ人にもうくかりされまうりと
かりふかり。給ひてかゝりまいうくてもけしきよ
の給ひやうりの給ひん。ゝ人はかのかたやの人へとうく
ゆ御しかれと。つゝあかず。いのちをとしるく抱か
まはかん。かしこゝのうちをそうするたから。ちてれたな
はなん。ゐのくさこいのかよさうへの給ひもる給
かうてわかくにえとりこうみけすんと。さつれ給
見よ。しかんと。うてこそことそうてのらるかゆう記
りのあり。ちなたもわらかし姫りのあり。あすく

いくへ。わらさすくてなん。えりのとぬ。あやハ。さうて
こ々もか。みうとにくり申しうやうに法を給ゐ。
をけひにいとやるとさことなりうくあやしさ人の。
いうそ附かさ給後。すかぬ給よさことも有なる人
ところを給つ堂。まう門のこと。うて之のそらすり
まくにかん。うこをすしぬ人々うへよきすさこそのりか
ひかれしそう。まに如りかとこと。いとおとろりなり
や。きめつへをし給こと。御前うさ附きうに如かされぬ
御しこそ此りのし給ちれ。うら見御つ不給り。さて
こそ如うつひたまりぬやう有し。梅つ本のさまを前え
さくし給やうかり。あれをみ給ゑいすそ。いと如そうへ

心そいりしぬ
一本心ハ浅ニ作ルトス
紺本曰

きれ。このさまを前ハさく守の附の人々かり。守しさ
を御後して。おす彼さうつし世給りかん。如そろ
さ。小方あれとさう給よ人ふもく如かされきうと
如りふり。狩て紀如うきりまししく。てをけひぬよ
の給如やりの給さん屋うい。如のかれやのさ人とうく
中御しくされと。つさおりがり附。いのちをとしるく抱か
きはきん。うぬしのみしをそうすうたらい。ちくれた
給あん。あのゑくきさいのさまよさうへい給もる紙
うくて公よろしにえくとるさみけりすらんと。さつ紀給
先うし。法らんと。ふうてそこをさうて包ら有か中す紀
りの有り。大たとなし門り。ゐかりの有りさまり。ゆきく



こそ。すゞろなる世のありさまに御心くもあはれに侍らん。
思ひてぞうけ給はりしなん。かへりてはあやし
き事どもあり侍るなさけなき事にあるまじとあ
なづりてか。おほやけをもとひさしきことゞもおもひしとおほやけに心ざ
思ひくのつかさにてのがりてこそ大臣の位よりはじめて思ひ
りふりのゆくへいはばのちにぞつかはされしとぞ。
思はせられしかば、人さへかはりにけりともいかゞなんかゝりし
りしとぞつきすべき、かくみるにはしもいひつくしもとを
きこしめすからとうとうかへさんといふ。小方てかく
なとりさまでさまならずていかにかはましてめでたきよ
ちかなてとぞ

られどもけしきみえて。のちよ身のうへんなう
もあしそ。らうけのあかい夜うりまづり。せらる
まいて尸けんとうふ。ありしあの給へつも。うれさる
つことかうしくのこと侍りしは。さう給へしるやあ
ひしの御こゝんとうくとらヤつゞあかくしまれとふ給え
ゐまよ。きこつしれしくめうけありらふれどもれいうくと
つもりすらゆき。ゆきくいうり花をのこまつてくおやしきこと
なり。さうて世親らへうきふとしをいえんやいかうこ
ひまんにあすくゆうそろうきこと侍はきんやいまと。枕そ
かくもあつし給へともものうかくいうへ給ひうる
ことようはゆん。さていよそて侍えりのとまさうそ。

ちうけ給ひろきんとうふとも。それうとかをはえさん
の給ありき。そのよしいはとうけあてちうさうらわ
侍さんこらうきてゆきれしうてうり。いみさ
てまうらうれみしなうて御もまうらさてれ
とありひしりとも。おろふもあうて。やまうりとる
つきて侍るよ。まうあうありいぬ人の。いよくとある
ふかうく。らずかうりよい。られとくうみよきうさ海
のことありとも。みしぶみてい。ひしりは。さてこそ
ふくらうとゐすさるみすれた。いうくらうくてありはさう
んおりて。そのゆいらんをありへえ。よ給さう侍さふる
さんとうふ。とも。心よりるすふれすうえ。きうせくとむと

絹本ニ朱点カケズ

ありふかしに給ひてちゝげが身をさいなみけれ
あるともゝ。さゝらりとられてなきさんとをしらん。
それりうらとかん世のくさ。この世にくもいまし一
らひあいさんと世かふかいけもはゝとくまうらく
世んはされしうかつき。けそくおやしきとの給け
はせ給ひさんうましさとの給ふとけむしあそふのそらも
なくてゝくりぬ。これはちらけのみかにとのりくてあ
れ小方よむとけむねやうしてゝくうさきてつましは。いさう
ろしうやいまらくまもやておろさんとの給つるとをき
えられも。いとられしと世わとちく世くいとおやし
さらに給をとらくれと。かりゐしうつぬまさてそ

十景

こゝはあさましくさふらふぬと。おもしれ。人のまゐり給
をねん思しうつ給へり。何ゆそむとそうきこえいたれ。い
と何ゆゑかさせとの何ゆゑぬとあそてやそ。ほくさ何
ありまうそてぬ。かくものくらせよみこうあさしを
まうそてさうけうとの給へてぞ。この御も給かせさう
つきは。あまうあさましくまうらう何はさうつらん。さう
ゐもおもてまさはしそ。だのとしくてえつくまつ
らうやうりよまれ。やまう給ひのはいまゝぬあさうして
うらみそう給は。いでゝ何もゆうされさうつるとを
みくまふそえうつるとこゝあれは。わくなうさを
わろくしやうし給ふ。ほとれさいふやありのはら。

紙もえぬあへぬそはざうんなりふこきみのゆゑ
えんすれハきくしんにいくさそののちいくくなる
ことをしらさとすんわうのさかれと紙とあひなとハ
めやうまうこゆれハ、えありのひろくありしくみんわか
そのちへハ、きこえてやしうものくさまふふかみだれ
こころゆんと思ひて、かくさとかくとこみて
けうぬ、わうしまありちふしてありふあらぬとし
比天をさうにしまうすもとも、もものはそのめしく
ゆやをいふるもうんちかとろえしそとう見しとひ
まうり給へなと、清見はいさくるうはやまら
をつうせつしをてらりうりのきあしさもみぬ蔵、いら

うりせりれはみほうとこ、こうしめしてぞうくの給ふん
とゆなうしくをけりをゆりひ、これうせり、され
とゆうハ見て給すはほうら屋ことまうりぬる見
と出はせ、内うりハさうにてこそわうん見くと出はもさ
さこそさうにゆううりてなうん、やまふかくし
よいくなんだやのくいふくて給ぬハおこうりそく
れしくこそゆかあらう、ゆうほれぬれきしさをみ
つたなれとのみくう見めつくへもとんとありひつきぬ
あり見こくゆきれ、又日ともい日のはと見えく経
さうり、よくうらあられなゆうらうひ人のえこと
うくをけなう月み三人、なうしめ人つまくはりなう

く。かくなして出家夜のことにてぞ。やすだ
らは[?]ぞとくしむ。いと[?]とくここのれんし
さて[?]おきれてまいてころも。いとゆるさとを
うひ人たりとらんぞ。たゞ君ふしゆくとたまふひ
のめしくら。かくて[?]もとすひ人とうふゆもた
まふぞ。夜のこゝゆきうて[?]君の御かり給ふよ。
太子六年ひさしまいりさりしこ[?]やまふしみそこれ
といとうしこれ人なる。家のこかるくしゆふよふて
こそやまふにとふいてよもみるなふゆとるひ人
と。やまふし[?]わくてらうらうし[?]のやまにゆ
までこくしいしニ十年よなりゆめうやさしゆしたり。

いかなる七月より修行をあそばしくりぐみ
たまへ。七日三日よりくみのたまへなど
つゆとふし御遊かくらうしや。山ゆしいとは給ぞ
かぬしくたらゆねてこそあくしらぬりしらた
まへらひく。らにとうりて毎のことやくそく一くさ
まをいとちひさくとみなく。なかつしりそ給ひ
人なとみぬかくにそのきて。これを佛ぞうし此中
よ物をんとそうせ給。弟子ひとりつらへりくそね
なりよ。さてしまやゆふしみなくひ給。ゆさすく
まりゆとすひのみちりあるもくみなくなん給ふ。
ゑやつくさしゆやのりとみて給れしらうと

とくまうれば。男をくるしめ。やまひをやしなひみじかし
つま給人なん。うつくしく父母ゆうなくなんとなれ
やけりも中に海行しまれとも。ゆうに海ありまれ
え。いうられたる師りえなんたびくわしく。後浅。
浮てくめやいなし給をぬとふ地とうひ人なとれ
給ことそ。やかなやしにゆし分りのは。この本をか
わろきまゆりひくされく。男をなきこりのよ地しひ
なして。ともなきのたちぞそもしくたかりまりぬ人
しやたして君なくうくへの給。地とうひともなへびと
のゆりのをなし給てそまれ。ゆとうひもとなな人
と。いすの給ば。ひうそしもなうるむをば地とうひ

人伊もうつみ給つら。御男のうまおろうれ孫を
くゆうみして。来のくふあをとしきりのふし給ゆと
せむりいえしもえ人給ふやうしく。ゆのおあれん
まり。やきうるうくよ。あかしうる人さまふもわ
ら孫え。いまくるしくて。ゆくされのとは地まし
なりとの給。地とうひ人さうへ浅ちてろまこそひくわ。
ゆとほとれこそたちと此の色浮くいろのとくり
ちろれ雨うりのしる人ふとそ。人々さすそ見る
とそいう給ぬ。そうてそよ大本おりひくな勤しう
も。ふう門なん作りきう。一みは今の梅つ所の意よ。
まのとされまふしとるりなん人てくおりひ。いずひと

ミヤコ凡ハ琴ノ名也

リウカクモ琴ニシサレトコノ琴ヲ
ココニアルヲキミアラズサレハココハ
琴ノコトナラヌカ可考ノ

つゆはらし比のさあそんは給ふなるみやこ風とふきあひ
きこゆるかんとくみかはさかやのけ人々はさく
みをいたす。かく梅かえそ〳〵ふ人々にかくれたり
るまかせれは。このこ琴のこゑかえれなくゝ給へく。
つたうくのりもれたくかさつけ給て
忠社 ありく人もむすかしくあらえ琴このきこえきこゝろをしさ
えやいさまはなく急なんとすくいくかれつて梅つるよ山
かそうくあやしくうやましきことの給れはこえ
まうり給ふぬれとめ。おそうしくなり給よきるこゝと。
すみゐゐこしいつ給ふええしとまさらもえなら
給ふんと思給ふかりすんちうあかく給ふとて

忠社 あるさともかゝるこのかしこのあひはふかきあひ
みくらのしきしむ尾さる〳〵。綾羅や錦なとさ
むことのりしこときんうしこまうかりひ給ふよ
ふかくちらくつゝひ給はふかうかつらく宮をと
所の御けりへそまかれは御ふ宮をも所いるよ
ゆかりての給つらかんとそ御前のふるまさ
くまうり給ぬは。なやましくしく御へはよろこ
まかりさ給へらほそけりのおまへ宮は。御か
そや。おやまかり給へまかしくやまとみはそうし給
やしきなん。ゆくゑもしるすゑて
梅壺 あるさくはそこなかれあのうやもれはさ給ふ

ミヤコ凡ハ琴ノ色

つゆはらひ出のさかえハ治まるやこ風とさまさひ
きてるりからくみりハやさしおやめはらへすはなく
みとせいろすかしく梅よりそきたるふ人とりすれおもり
るりきれハこのまま紙ひくらしれすくしかりく
まろうくのりきれくうさつけ給

忠社

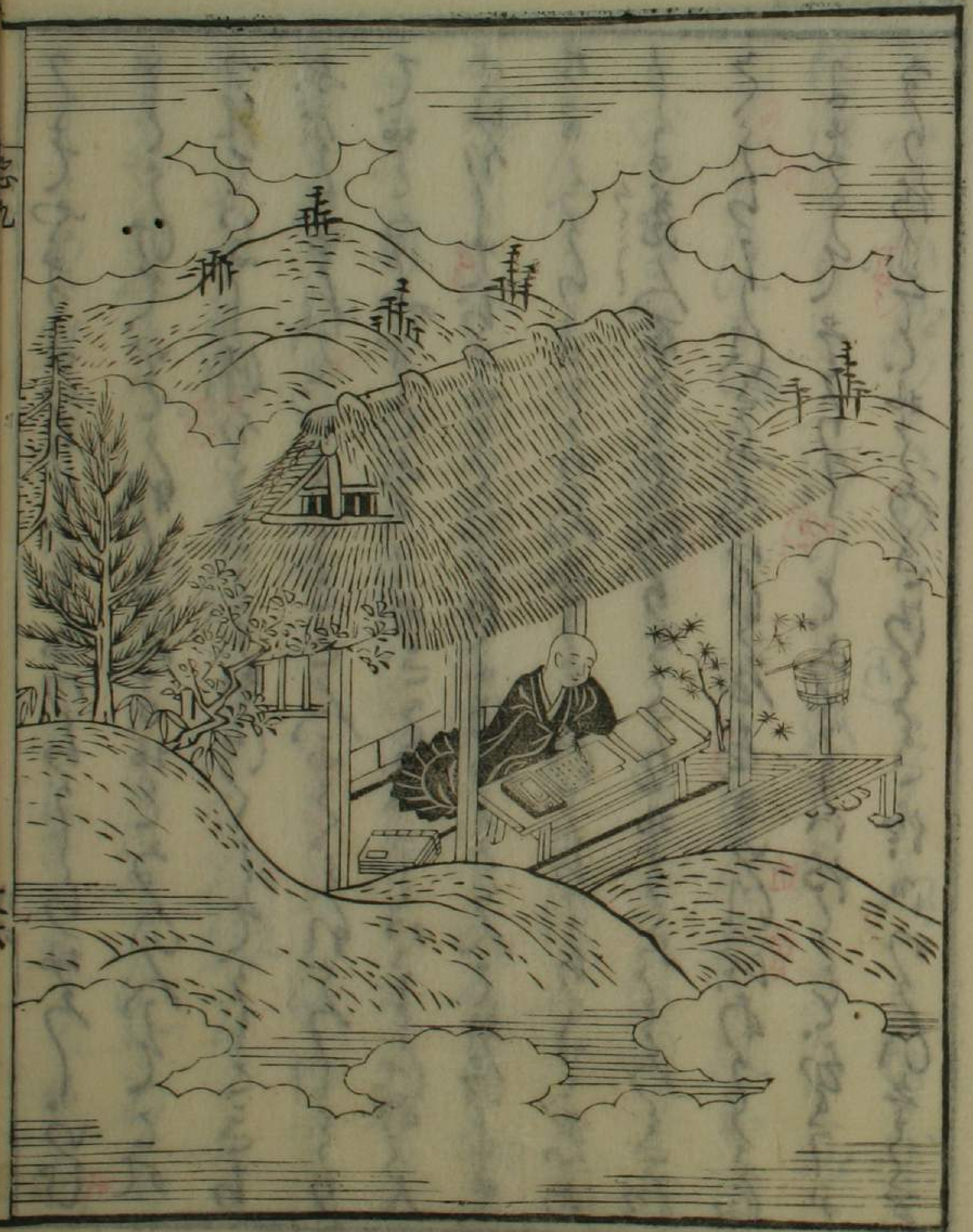
君く人もむすくあるそ琴この音ようらを読
こやいまハ声く廊ん、とすくくられつて梅の香よ泊
みえうくあやしくなやましきこその何れハえん
まうら何ぬわの、君そしくなう待ちきるとこと。
すかし、えし、作りん、えしをまさるもんなら
待んと思給ふ字かりすんちろかきく待まそ

忠社

なさうれうなるこの人の心あひあひ
みくさのしらし色きさ卯、紙衣や物ほさ
むことのりしこさるんうしこまり物りひ給ふ
ぶとくちくつひ始すなりくうしく窓を
雨の治りくへそまうれと海の窓を雨いるよ
ゆりしての結つうまうんとそ御恋るそまそ
くもつり給ぬハうすやすうく海へハよろう
まち給ふえうろほそけりのさま人なハ何ま
そや、さやまつり給へまらくやしとみはさろ故
やしさまん、ゆくえちてすつてそ

梅壺

あさくさのそこたれかのさやまれハさ給



せん舞とゝのへはりしかど、さとくて我も日くれ
ぬれば、たゞおひくりつもよそぬ

かくてやまよりて。もとのつらしらずかへし。いむ
ことゞもそ。そこれしけるか。かくうちのへそこれ
つれていみし御かたらひをまたくして。うしこころ
思ひなりまされと。ひとりしこころへかよひされ
てかくすふをも思ひしめきくみしはらしにわらん
とかりしてちくかくいらまはかくらんとかりして。
ただ目にくらよわたりぬるとてはらしらりて思ひめ
しよ龍人所のもとかりさうかくもろさ給
さくらりはさてかしを在らゐさいりはわりかさ
またうそてあかりしとらていかりくもきまへく
なりはしと。かくろうきはみ給へ消つひのきまさ

いまはいみ給ひて。もとしくかくわかぬ。一日わかさ
れ給ひてりもう御いとま給。せめくゆきてぬはよ
りまうとまり給ひてとてわか。頭しれ思ひな
といひそさしまりはかつれ。かくしてりはかわく
さまんはかうそくうくしと。けうさきれさらくしと。
思ひくゆりてはうなりとりくわかくゆき
うかりし給ん。日比かりひ給ひらうりもさくろ
いてるれそ。たゞいふあやしくらりゆきなせ侍ると。
扨よしせさ給はくて給ひちて大親ききりと
めさせ給へと申しうちよりもれつひをわかち
てかしめさせ給へと申しもさしらさ申して侍れを。

かくてやまよりて、おまつりしらせあるをいひ
ことうけて、そこれしけるが、せとうかの人々そこれ
つれていかし御所へまいるをぬくしそうしこころ
思ひなりまれん、ゆかりしこと人ふかくこれらうとり
て、せひとすふかきおもしめさるみてはらしんもへん
とせかりしてもちくせとくいららまはおもしゆゑんとせ得して、
おほ目ならねむらぬ家とさにららりして思ひめ
しる麗人氏のこ経りさて、せとしれてろさ給
そくらりはさふてうら屋ざさ川は、おろさ医
まかうて、京りし、とらてりい師しと、おもうく
なり給ふし、せとろきたる給ひ泣つるのちさも芸

いまさらに給ひて、もとしくなりぬ。一日梅壺さ
れ給ひさりしもの御いとま給。せめてかうて給は
りのちさまに西り給ひてそなん。頭の君な
といふそこをまり給ひつ。せとしもてりはおくら
さまれかうてうりしうと、ゆかされさるらしと。
ゑみくやうてはかなりとやしりはぐくりゆゑか
うつら給ん。日比なりひ給ふらるりもさうら
いとられし、たゞいとあやしうらりまるさせ給うと。
おとしせさ給給ぐて給ふらちてあ親をそくれと
めさせ給へとなしうちよりものつるひをわかち
てゆしめさせ給へと常しもてさらぬ程く見えた、

かくうしとおもふことなしめしかなりはかなき
ゆくへもかくしてこそまかり給ひぬへしらうなり
かんをとふりしてゆかりてまかり給ひにしかまかり
給ふぬことなりおもひを給ひてとふかなきかなれ
なりおきことはおもひつりつくしてしの給ふかし給ひ
てこれたりなりにはなき給ひぬらんとのみえてこそ
つりにたり給ひせらりにつ給ひとをひしりけるか
くりなきものなり給ひてにおりのざりそことい
ひかりはそこりかやこ給ふとかきひりりの
せむつひしりえやむしるれこそあおれと
てなりし給ひりてそのよしかせまそかし

まくれなんとてぬ。あやしうおもひしこゆるかなむ
はいかなりかしこふ給へて。かけもあくそくりと
ゆきせ給ふりそくへぬいせの中をすてなりけり
ひなかそ給ひぬれ。給ふしかしなさりらんなく給
らかやいとてなのは給ふしくとまりおしへこそ
うしとおもふへきこともやすのをそれしおもりいてこさ
おもひめくるにこりのをみなとかひそやかなし
らんまかりなりのゆかりてふるとしまかれ人なれ。
おもひらむもおくなこしもわつしいとかなしく
れしわかやそうかれをおもへの給ふむまかれそうすりて
まわしめ。わかふかりもの給ひこと給ひし。

かゝるとみも侍らざりしぞ。いかなることにか侍
らん。人の法をもちひしは。いとあやしくおぼしける
しかしどもそのものの給ぞ。たゞいくしさこと侍なり。
いまはえんりうがしくらんとうらの絵とあり
し。それはうきをしろうなるぞ。いかゞくるすかしさ
をんを給ひつるぞかうけあすく地をそろくに地にたゞう
つゝたゝつれに。ゆかされぬをしきれありきんよ。
おりひんしはきるなるん。いかになれることきてゆゝ
たまひし。ちりけりに人はわさつるひろうこときそとし
給けるとおんかき給ひりし。えんとさくはえこと
ましく人のえん人はくめりうかとしあすかうし人ぞり。

いさんやさしく見ゆやれ人よりはひときんや。なとしれ
らん人は、さる法さかぎりの子給ひておもふ海にこそ
思はしうんや。このことはさこめてさりぬ人よ
そうし道まうづかり。ふみんなるこそかれと思ふ
給の家むかしよりかうしうれもえてゆかん
なりけり。そのさるうちにさとひとりしてこれこそなうり
思ひしとをうくもさらえん給ひてなくしはるそ
給ぬかくて思ひおれは思ひよりそうて思へなく帯海
しくわやしきこしをとするに。一条のとさうやも
かり。こ君のいざくとおもう給ひてよのこのなかよ
とよぞこれをそうかはしかゝ。わかうきをとなうしてあうか

しや。きしうらぬ所よりまひのぼくらうすいを
ところどころたうとくもうちもられた
まひろうと申けるうへ。世は座けるも
きりう海つかそ。うつらもねらうしとき給てさ
万持よおのひらむとのえ申ける給ふかうまくえり
一条とかふうのそとれきうしと申の身をまうれ
小弁の御給ひぬらと然申りひつまてた給とろ
そん座うし。むるうさと然しお川め世ぬるき
くとし給へとも志ふりまし。うてゝそとうし
るすひく。おもろう歌くらとゝよ申うり給ひす。歌さ
給ふ行くしまうてひなろ河よらう給せる消め

ことも ともかくてみ給よ。ましてかれしく申す
え給ぬれば。その御かたともそ。らんのそこひと
もろひり。ともかくめくいまて。申せいとのゝり
有れ給もそ。しうの川のかしけるうこ給ひえこわ
川然。この川ぞともいられせるみと申り人
やさ世中よ座る人も京よおすよ申身ゆまは。
給河よとそ有れ。わられかる物の世中うり
かん給けるとて

後室 思ひ出るくまをみうのかれみなせつハ流れさ
こそわすこえてけるここ西へことしてそ申すほえ
給もそ有れまえてこれ申て又給くおなむしや

しや。さしもしらぬ所にいたりてひのあたりかなすみと
ところ〳〵にたなこゝろをさしかくしたれ
まひなりと申けれハ。ものはかなけなる
都のうちのいとこのしまさらぬものさし給ひて
いそきておひしもとのさとにすみ給ひぬ
一条とかいふところにかくれゐ給ふものを
小宮のいかなる御とゝもへまいりまして大殿ところ
殿上人ともあつまりてすゝみのめ世のおもしろき
くさ〳〵もとのことくなりて。こゝろとゝし
あはれ。いまもむかしもかはらぬ御かたちに
給ひたるものはいかならんとひとりよりつく給ひける

ことゝもをとりそへてみ給ふに。まことにしく地
え給ふにも。その御ことゝもさらにのこりなひと
まかりけり。ともかくもめてたくいはんかたなし。地いとのあり
なれ給ひて。はやくの身しけるに残りこれ
ハ此。このかはりともいふれとはかなきみそ地り
世の中にはなれたるこゝろにありしかは
侍りけるにてなれ。おそれなきものは世の中なり
かへり侍りけるとて
思ひ出るに見るにはみなせんはかなくき世
こそありけるこゝろにこそまとはえ
給ひてなれまいらせしこれにゆくえ給ひてあはれなくや

よしともおきハおもひきしきもおくうらみつ
ねもてかりそたてすよしろ川ぶつまことにと
誠ものし給ひなり。うらみさましくもの給
ぎれと。情深く給へるひ。かく。日比ハあやしきこと
のあはれかけひ給ふ。つれなくうちみもまたてなん
ちとうら侍り。かくこそみともまつりこともやちかよもあ
はしそえはかましくかけひ給ひ遣て。いさはらし
給みなへき人もなかれハなん。うらよりかりあ
川かてなからみなせりて
千景　わさとこそ　なこえなてきえみなせうハかくさ
かちかそ我ハ志川也なとそさかりねのきこえて

かくかく川よこの北方わかきこともわさちつきたりし
ちかりしめく人しきれ給ふ。北方さへにはかそれこと
うきうなし。かくし月日のふるまくに。かはし歌なくく
ことなくさむよりなくかはし歌て。屋まうこ
かりてかきこなりん。よの中いふうきものとかなりし
ゆかりてうくの給
千景　ちかくすこれなきさことそてたこれらるるかきれ
くなきも歌く舟人。よの給たま中ね
ひともなく泊りなてふたこれうにもする
なかなやくるみりいさん。さくりんの助
きなりかゝらうしなくねとも志くるなみな

よしや世ハめづらしきもなぐさむかたもみつ
ねもひてみてそたのしくよろこひはつかしきらと
我ものし歌をよめり。うらみなさましくもの歌
まれと。情深き歌人なるひ。めでたく見ればあやしきこと
のあるにおりひ歌さへなんくらぶるにも見えてなん
ちかきうち絶えり。然こゝにまさることをもやちかよもあ
伝まそえはつきしくおもひ歌をもまして。いさはらし
歌みなへき人もなきなれハなんうへよりあ
りめてなからみなせなりて

千景

わさきこそ。つゞきえみゆるせるハあらさ
からめ我ハ志つかなるとも志ろうるねのをさへとて

かつよこの心ある人ハことゝもわさちつきさらし
ものけめてくらへしなれ歌。心あるうほきれことと
かきりなし。かくて月日のかりよく。世にうれしく歌く
こなくさむよりなくかうし歌て。春まさこ
りけてかくなりんよの中ハなうさきのとかりく
ゆかりてくの歌

千景

ちかきちるさこをそえたこれのうまかれ
くみそも歌く衆人のの歌たま中ね
ひとつもなく涙うなてふたこれうほなる
かかへやくみりハちんさへりんの物
もろかたうつなしねともちくなそみな

たえといふあふもちくるしかりけり
しるけきを絵にかきてよ

先一条の御方ゆかりし歌くさとゆかしくれはいやましく
とまるまうらる給よ。ゆかしくおりしまゝにハ滝ま
しとらうつしひてかゝ給よ。此家の花をそく紀
のゆかれくうてかゝのくとみ給く。此の方

後室 待人の袖をとこれたるをさき君の秋風よ
すひくなりそう。君との給ふとろには世をそし
くゆかゆかれはゆかいとのれうくゆかしまうりのやさこ
えしとゆかりくとうくられ人とい上絶れはとこそ
てはえあかぬりのすれはさてうすの風のあやし、
なりそなれたるとそなん

千景 秋霜よ時くかりし秋風のいそくあらしよある

うあやしさりのもゆかしぬゆくらよ

同 秋くるも来家の色ゆかうとは風にく
なる花もおりかん。家の色ゆかれよと恋
えをゆかり給ふ君るゆかうりかるのおる我み
しさりの八女のゆか君ゆかうしゆかしはるてゆかう
こゆかのあゆれゆくゆかしゆかゝん人はふうゆかれてと逢ゆかう
も。ひゆかゆかしくそ

後室 あらく家よ色かりゆく秋かせは女まくく
うをとうひなうもうてそ井給うりとく此ゆかしく
のかうひ給くし亡年つかりあかしよ百れ給う

千景 ひ給りのみすしられはかりし給とくよ。あうられとし

心を清くしてはらうすくまほうしくなりゆく
にあらいかこまつきてはり。まつしつゐそく
みなみもとのさらよおなしくつひよくしそく人
よりしこれにあくみ給ひし。下つくるんうをも紀
とひくとくまちてさいひくわらんやいまわれ
とらまつくりまつりていやめれなれんとそはらう
まつりをりかとのりおゆくものろしうのこう
けのぬしこれをまりまへりける。こる人のことなん聞ふるら
きる。或れをそこの時に大将よりかまてりう
すくはうひきる。これ一条殿のむかひ給へるか
とまりてこれやくへりめ行しきなく

亀語りも山さしのちりほとけなりとものおゝう
まかり給てをきをみ給るされまくらひやさうきもと
まのくもとう。いはあうくてさ紀の高あり
このおされまぞ西り。前おり。物ゆまらぬ人さ
ふも公あそけれるさまつりわりましていそう
きらふしてあん亀給ませしゆ傳もやそう
我世の中もよ。久しくえをかゆしさ給は世すはか
こまり我ましまんと給ひてをのこ君乃
ゆきなんよ。一とは經だおうれめぬ。はくら世給
ろ。ゐなくし給いみ。我給ののすこし給ふてそ
れさあめし給どの世あしわくはくさりてあれな

こよひすくハなのよ紙みちくもあれとて、あるし
河つらひけりのみな繝縁なる絹とて天狗よ。
ものなまへいろかそて、ものゝ紙つましてとり出て
天狗よ、紙つまくりものをえつけて、ゆきしゆまゝ
ことに人給く。ゆきとかれてうへるの法そ
日ころたる縁かるてひそかしてもてあるにあ
るや、家めるはえしとの給て御法たてせ給ひん
とてよ法川れ法そものしてちかくべあつまりり
てなほよいさてかなほきぜ川るそかねのり庭にふ
霧かんかりせ見てまつひ給ふとふ大元か
きぬもしてあなりしかつちあまりて代理ときさき

あけ川かくあれいるなほきさしてまちもこと
見給ふとふぬこころをそひきなにかくを給ふ

天明元年辛丑年九月十八日淺井公羽ノ本ヲ以テ校合同廿日畢

田中道麻呂

三十五